社団法人
海外と文化を交流する会

（社）海外と文化を交流する会会報
2011 年 2 月発行（４カ月１回発行）
第 45 号

”知と心”の繋がりに文化の原点を求めて

●日本を理解し日本で学ぶ留学生への支援　●貧しい国々での医療活動を支援
●各国大使館との協力などによる文化講演会など

**川崎小虎**「かいつぶりの群」1976 年作 80cm×60cm。この日本画は、日本と豪州との交流のため、海外と文化を交流する会が依頼して作画したもの。1977 年に寄贈。現在は豪州ヴィクトリア州メルボルンのナショナルギャラリーに所蔵。川崎小虎は 1886 年岐阜県生まれ。1910 年、東京美術学校日本画科卒業。祖父の川﨑千虎に大和絵を学び、祖父没後は、千虎門下の小堀鞆音に師事した。初期には大和絵を基調とした叙情的な作品を描いたが、次第に人間的な色合いの濃い作風へと変わり、晩年は身近な自然や動物などの素朴な主題を描く。戦前・戦後を通じ文展・帝展・日展で活躍した。文展「花合せ」特選ほか多数の入賞がある。1943 年、東京美術大学教授。1961 年、日本芸術院賞恩賜賞。1967 年、武蔵野美術大学名誉教授。
1977 年没。

# 随 筆 ・寄 稿

## ■新しい年度に向けて

ジョージ **W. ギッシュ Jr.**（社）海外と文化を交流する会会長

2011 年度に向けて、「海外と文化を交流する会」の歩みと展望について簡単に挨拶を述べたいと思います。丁度 30 年前に当会がニュージーランドの Christchurch 市にある Canterbury Museum に 16 点の日本画を贈呈しました。その時松岡裕子氏が会の創設者松岡朝女史に代わってその代表者として贈呈式に参加されました。この 30 周年を記念するために、新年度にあたり、現専務理事である松岡裕子氏がもう一度ニュージーランドを訪問することが望ましいと考えますが、昨年大きな地震が Christchurch 地方を襲ったことによって先方の環境が正常に戻るまでに時間がかかることを考慮に入れると、その訪問を 2012 年度の計画に延期することを考えた方が良いかと思われます。

それに加えて、もう一つの企画の情報がオーストラリアから届きました。ヴィクトリア州のハミルトン美術館は創立 50 周年記念行事として、1977 年に当会からオーストラリアに贈呈された、現在 Arts Victoria と National Gallery of Victoria（NGV）に管理されている日本画全 25 点を展示する大きなイベントが 2012 年の初めに計画されているところです。このニュージーランドとオーストラリアの行事に合わせて私たちの会員が創造的に且つ積極的に関わることが何よりも望ましいと思います。

この会が、海外と文化を交流するのは、日本の歴史に沿いながらの行動といえましょう。それは上に述べたオーストラリアおよびニュージーランドでの２つの行事に集約されています。松岡朝女史が当会を創設して以来、日本と違った文化の交流ということについて、一貫した目的をもっていたからです。すなわち、明治以降の欧米と日本との文化交流がなければ現代日本の文化は考えられない。さらに、古来のアジア大陸からの文化由来なしには、日本の伝統的文化も創造されなかった。それにも増して、40 余年前に朝女史が思案された「海外と文化」の交流は本来の欧米やアジア大陸との国際交流に限らず、それと正反対のオセアニア地域との文化交流にも新しく展開されました。その志と努力がやっと少なからず理解され、私たちの時代に実を結ぶようになりました。

私たちの会の初心である朝女史の大きな働きを再確認しながら、その志を次年度以降にも私たち全員が一丸となって実行した上で、次の世代に、少しでもバトンタッチをすることこそが今までの苦労と努力が生かされて将来の展望を可能にする唯一の方法です。今後とも、皆様のご協力とご理解をお願い申し上げます。

2011 年 1 月 20 日

## ■松岡女史と寄贈日本画の思い出

マイケル・ネーション
Manager Executive Office & Government Relations, Arts Victoria

私は 1977 年の小さな代表団を率いた松下朝女史のご訪問をほのぼのと思い出します。
当時のＶＭＡ（ビクトリア州芸術庁）長官であった Dr Eric Westbrook が、この仕事を始めて 9 か月ほどたった私に､女史のご滞在中のエスコートをひきうけるように申しました。
オーストラリアの国民に惜しみなく寄贈され、Victoria 州知事 Rupert Hammer 卿が受領した日本画 25 点の展覧会は、芸術大臣と大蔵大臣（Minister for Arts and Treasurer）を兼任していた同知事の列席のもとＭＧＶ（ビクトリア州立ギャラリー）で行われました。
わたしは、松岡朝女史と過ごしたとき、その活力、視野の広さ、行動力は全く並みではないと感じたことを思い出します。
あの頃の日本文化の優れた大使としての彼女の資質をよく考えると、彼女自身の経歴から、アメリカで高等教育受けた時期から中国での仕事までの女史の社会的、国際的に深いかかわりのある人生がすぐにわかりました。
松岡朝女史の訪問以来、この 25 点の日本画を広めていくために私達が協力してなしえてきたこの進展を女史が喜んで下さることを確信し、さらに、作品が専門的に保管され保護されていくことを保証致します。

## ■REFLECTIONS ON LADY ASA MATSUOKA AND THE NIHONGA GIFT

Michael Nation
Manager Executive Office Government Relations Arts Victoria

I fondly recall the visit of Lady Asa Matsuoka in 1977 who led a small delegation of Society members.
The Director of the Victorian Ministry for the Arts (as it was then), Dr Eric Westbrook, asked me to undertake escort duties during the visit, some nine months after I had commenced official duty.
The exhibition of the 25 Nihonga paintings, generously gifted to the people of Australia and accepted by the Premier of Victoria Sir Rupert Hamer, occured at the National Gallery of Victoria, attended by the Premier who was concurrently Minister for the Arts and Treasurer.
I have very special memories of my time with Lady Asa Matsuoka whose dynamism, vision and energy were all quite extraordinary.
At the time I refelcted on her qualities as an outstanding ″Ambassador″ for Japan and Japanese culture and from her own Curriculum Vitae quickly discerned a lifetime of social commitment and international engagement, from her time in the USA to complete tertiary studies to her work in China.
I am certain that Lady Asa Matsuoka would be proud of the progress we have collaboratively achieved since her visit to promote the gift of the 25 Nihonga paintings and ensure that it is professionally housed and conserved.

## ■豪州寄贈日本画の経緯

**大谷俊介**（社）海外と文化を交流する会常務理事

あれから4年以上もたつのに、ついこないだの出来事のように思える。それは2006年の暮にオーストラリアのメルボルンで開かれた現代日本画展のことである。この展覧会は2006日豪交流年の最後を飾る重要なイベントだった。主催は日本画の所有者であるヴィクトリア州の芸術省であったが、日本の外務省や商工会議所が強く応援し、もちろん日本画寄贈者である「海外と文化を交流する会」はこの展覧会開催に全面的に協力し、イベントの盛り上げに大きく貢献したのであった。その様子は2006年、2007年の当会会報に詳しく報じられている。

そもそも2006年が日豪交流年として指定されたのは、1976年に画期的な外交関係として成立した日豪友好条約締結から30年経過したことを記念してのことであった。それまでの日豪関係は通商協定こそ調印されており資源貿易などの商取引ははじまっていたが、太平洋戦争時代の日本軍の非道な振舞などにより対日感情は悪いままであり、両国民の交流もまばらであった。日本としてはこの条約締結を機に反日感情が柔らぎ経済を含む二国間交流が大きく発展することを期待した。オーストラリアにとっても建国以来この種の条約を結んだ国は他になく、それまでの英国志向の外交をアジア向けに軸足を移すため、その最初のパートナーに日本を選ぶという重要な外交戦略であった。

以下は、私が当時の関係者から聞いたうろ覚えの情報に基づき個人的な想像を交えたオーストラリアへの日本画寄贈の経緯（いきさつ）である。

当会の創立者である（故）松岡朝女史は戦前、戦中、戦後を通して、平和的な国際交流の哲学をもち実践者でもあった。その松岡女史はこの重要な外交関係の樹立に際して日本の政府筋から相談を受け協力を依頼されたのであろう。そして、ご本人自ら深く考えを巡らせたにちがいない。その結論として、反日感情を柔らげ両国で良い関係を作っていくのには文化交流の促進が一番望ましい道であろうとの考えに至った。

こちらの心を見せ相手の心を知ることで相互理解が深まり良い国際交流が生まれ育っていくにちがいない。そのためのひとつとして、先住民を除いては歴史の浅いオーストラリア国民に古くからの伝統美に満ちた日本画を紹介し、日本の心を知ってもらうのが良いのではないか。こう思った松岡朝女史はそれから5年以上かけて25人の日本画家の巨匠、一人ひとりを訪ね「日本の心を理解してもらうためオーストラリアに現代日本画を贈ろう」と口説いて、そのために特別に一枚ずつ描いてもらうことに成功し、集まった25点の日本画をオーストラリア国民にプレゼントすることにしたのであった。

経歴も流派も違う25人の巨匠が心をひとつにして日豪文化交流を立ち上げようとするボランティア活動に参加協力した行為は、今にして思えば奇跡的である。こうして友好条約締結直後の1977年に25点の日本画がオーストラリアに寄贈され、メルボルンのナショナル・ギャラリーに展示されることになったのである。この事業は快挙として当時多くのメディアでもとり上げられ大評判となった。

ところが、寄贈当初には展示されたこれら国宝級の日本画は、ギャラリー側の理解も浅くまもなく扱いが粗末になりついには保管場所さえ定まらない行方不明の状態になってしまったのである。当会としてはこのことにずっと心を痛めており、先方のギャラリーにも何回も問い合わせをしたが良い対応が得られず30年近くその状態で放置されたままとなっていた。

しかし、折良く2006年が日豪交流年に指定されることになった機会にこの寄贈日本画の展覧会を再びメルボルンで開くことを計画したのである。そして、メルボルンの領事館の人たちなどの努力により行方不明だった日本画がメルボルン市内の港湾事務所の倉庫に額装などに多少の傷はありながらも、ほぼ無事に眠っていることがつきとめられ、展覧会の開催ができることになった。

この怪事件とも言える内容は2006年12月のNHK「おはよう日本」の中で「失われた日本画」と題された特集番組としてジャーナリスティックに編集され放映されたのでご気憶の方もおられるであろう。

とにもかくにも幸いにして日豪交流年記念「現代日本画展」が2006年11月から12月にかけて開かれることになった。展覧会場としてはメルボルンの国会議事堂とも言えるクィーンズホールのロビー、そのあと引き続き市中心部の美術大学のギャラリーが選ばれ、いずれも大盛会であった。日本からも多勢駆けつけた。もちろん当会メンバーも参加し、併せて北條正庸画伯による実演付きの日本画啓蒙講演会を企画した。それは日本領事館で開かれ多くのオーストラリア人の聴衆を魅了した。

この展覧会の盛会振りを見て、在メルボルンの芸術省は寄贈された日本画の価値を知り、日本文化における日本画の重要性を認識するに至ったのではないだろうか。最近になり、これらの日本画の展覧会が来年以降に2件新たに計画され、当会もそれに協力するように依頼してきた。そして、日本画を含む日本美術、そしてもっと広く日本文化全般の理解を通して日本との国際交流を深めたいとの気運が芽生えはじめたようだ。

松岡女史が考えた時から30年たって遅ればせながら、彼女の期待した「文化交流を通して良い国際関係を作り上げていこう」との動きが見えるようになってきたのは当会にとっても大変よろこばしい。これは今、世間を賑わしている自由貿易協定への参加問題にも良い影響を与えるであろう。それはそれとしながら、当会としては上記の日本画寄贈事業の展開を教訓として、これからもより積極的に海外と文化を交流するボランティア活動を進めていく覚悟が強まったのである。

最後に、2006年暮に開かれた「現代日本画展」の下図のような案内パンフレットの日本語版を、この会報の巻末に別添として示すことにする。そこに25人の巨匠による25点の日本画の全貌を見ることができる。

## ■いのししパパの育児スケッチ

**松岡恒太郎**　(社)海外と文化を交流する会常務理事

**おもいで栃の木と自然のぬくもり(2010/10/6 の日記)**

栃の木には思い出がある。

Jr.が産まれたときに，庄内のＩさんご夫妻が栃の実のお餅を送ってくださった。

それはそれは自然の香りがして、最高の食材に巡り合えた感動を妻と味わうことが出来

た。

山形にはもうひとり、よく人となりを知る友人がいる。Ａさんである。
Ａさんの山形朝日町のご実家には、42 年前に植えられた栃の木が、
うっそうとした葉の裾野を玄関先まで広げていた。
数年前、秋に訪れたときに、その栃の実をいくつか拾った記憶がある。

Ａさんの工房（蜜蝋制作）にも、この秋、栃の実がなった。
２２年前に蜜蝋をはじめられたときに植えたそうだ。
無理を言って、その栃の実を送っていただいた。
それがこれである。

栃の実はやわらかい外套を着込んでいる。
その殻を取ると、何とも言い難い秋の色、
艶をした実が顔を出す。
絶対人工的には形成することができない
自然の色、すべすべ感である。

手で触れたら、しっとりした感覚がビビッと脳に伝わった。
このしっとり感はまさしく自然からの贈り物であった。

**都会は森の恋人(2010/10/9 の日記)**

この栃の実だが、頂いてから 3 日が経過、徐々に水分が抜け色も黒ずんできた。早く植木鉢に植えなければとは思っているが、都会では土すら容易に手に入らない。
情けない話だが、明日にでも園芸ショップなどで買ってこようかと思う。

今回、栃の実を手の上で感じながら、あるプランを思いついた。

里親になって苗を育てて、それを森に返すことがひとつのムーブメントになれば、楽しいなということである。
都会生活者が森とつながるきっかけにもなる。
これからの世の中は、やろうという人がいい意味で、インターネットを使って、ゲリラ的につながり、それが大きなパワーとなるんじゃないか？
誰がリーダーで、予算はどれくらいで、期間はこれくらい、効率を優先して、等などなんて関係ない世界。
善意で協力しようという人が集まればそれでいい。
口ばっかりはさむけど、何もやらない人はいらない。

盲導犬が成犬になるまで一般家庭で育てられ、愛情を注がれて、人間っていいものだと身体で感じとり、そして盲導犬として人間の役に立つというシステムがある。
都会のベランダで、たとえば栃の実を育て、鉢がはち切れる前、つまり 3 年くらいまで大切に育ててもらい、それを管理する山の一角に最終的には戻す。
その実は一部、栃餅として、残りは別の協力者（都会人）の下で育つという連鎖が生まれる。1000 人に 1 人の協力者がいたら、東京だけで、単純に計算しても 10000 本以上。これはすごいことになる。

ほんの少しの勇気と善意がこのプロジェクトを形にする。
なんたって、協力者の一人ひとりが、その日その日に水をやるときに始まる「おはよう！」という掛け声や、「こんなに育ってくれてありがとう」という気持ちが伝わった木であれば、その思いが集まった森？はとても力強いパワーを持つと思う。
どの人がどの木を提供したかなんて、わからない方がいい。
この森のどこかに、自分が育てた木がすくすく育っていると思うだけで、
こころが大きくなる。

我が家の隣の部屋の男の子（多分 6、7 歳）は毎朝ベランダで水やりをしている。
その姿はとても可愛いものだし、大人以上に，そういうチビッ子に参加してもらえれば、これ以上嬉しいことはない。

空を飛ぶ鳥を見ることが好きな我が家の Jr.は、将来水やりのさ中なのに、空ばかり見るようになるのか、どうか…
でも、その姿もまたいいものであろう。

関連サイトについて：
蜜ロウソク工房「ハチ蜜の森キャンドル」
　　http://www.mitsurou.com/
　　はちみつの森で検索すればサイトにヒットします

いのししパパの育児スケッチ※
　　http://boar.blog.so-net.ne.jp/
　　いのししパパで検索すればサイトにヒットします

※いのししをこよなく愛する 40 代の私（松岡）が日々の育児で感じたことを記したブログ

# お知らせ＆報告

## ■コンサート「感動のチェロとパイプオルガンのタベ」のお知らせ

2011 年の「海外と文化を交流する会チャリティコンサート」は、下記のように開催いたします。皆さん、どうか奮っておいでください。

出演：チェロ　水谷川優子
　　オルガン　藤森いづみ
演目：バッハ「アリオーゾ」
　　フォーレ「ピエイエズ（レクイエムより）」
　　カッチーニ「アヴェ・マリア」
　　バッハ「無伴奏チェロ組曲」より
　　ウイリアム・マサイアス「ファンファーレ」
日時：2011 年 4 月 15 日（金）
　　開場 5:45　開演 6:30（バザールのため早めの開場です）
場所：霊南坂教会（港区赤坂 1-14-3）
会費：一般前売り 3,500 円（当日 4,000 円）
　　大学生以下 2,000 円

**推薦の言葉――日野原重明**

（聖路加国際病院理事長、日本音楽療法学会理事長、(社)海外と文化を交流する会顧問）

水谷川優子さんは、日本の交響楽団の祖、近衛秀麿のお孫さんで、６歳の頃からチェロを習い始め、桐朋学園卒業後、ザルツブルグの室内楽団の首席チェリストとなり、以後欧米の各国で活躍されています。幼い子ども、青年、中年そして、若い日を懐かしむ老人にも、清冽なチェロの演奏は、心の安らぎと生きるスピリッツを与えてくれます。

お問い合せ、ご予約：社団法人海外と文化を交流する会
　　TEL＆FAX03-3370-6786（午後６～９時・田口）
ご予約について、郵便振替「（社）海外と文化を交流する会 00130−2−366249」にお名前・ご住所を明記くだされば、チケットをお届けします。

## ■「つどい」――日豪 EPA について

日本とオーストラリアの間で交渉が進められているＥＰＡ（＝経済連携協定）。消費

者にはどのような変化があるのか。また、日本の農業や畜産業と工業国としての利益を両立できるのか。

その柱となる自由貿易協定(FTA)をめぐって、06 年末から EPA 交渉を開始した。農産物の対日輸出拡大の好機ととらえるオーストラリア、輸入自由化が国内農業に与える打撃を懸念する日本――両国間では温度差がある。日豪の輸出入総額は現在約 4 兆円。オーストラリアの対日輸出品目は、石炭、鉄鉱石、天然ガスなどの天然資源が中心で、その他に牛肉や小麦などの農畜産物がある。日本の産業界は、エネルギー資源の安定調達という観点から、日豪 EPA の締結に強く期待する。日本にとって農業大国豪州との EPA を実現させるには……。

豪州と深い関わりを持っている当会（社）海外と文化を交流する会では、この問題についての勉強をしたいと考え、下記のように「つどい」を開催します。

テーマ：日豪 EPA について
講師：オーストラリア大使館のFTA/EPA担当オーストラリア人オフィサー
日時：2011 年 3 月 26 日（土）午後 4 時～ 5 時
場所：東京・銀座教会地下集会室
（東京都中央区銀座４－２－１・地下鉄銀座からすぐ）
会場整理費：1,000 円（会員無料）

会員の皆さま、ぜひご参加ください。ご参加の方は jimukyoku@kaigai-bunka.org までメールか、あるいは 03-3370-7654まで FAX をどうぞ。

## ■寄付のご報告

渡辺いつ子さま、松岡裕子さまから多くのご寄付を頂戴いたしました。深く感謝申し上げます。

## ■会員の募集

海外と文化を交流する会は、すでに 42 周年をすぎました。ここまで、ずっと続いてきたのは、会員の皆さまのバックアップがあるからです。御礼申し上げます。
会としてさらにボランタリーでの有意義な活動をしていきたい、そんな願いをこめて、常に企画を検討しています。
幸いに良質な会員の方々ばかりです。さらなる発展を期待し、新会員をご推薦ください。自薦の場合でも、理事会で面接いたします。事務局までファクスあるいは e-mail でお問い合せください。

## ■会費納入のお願い

2011 年度の年会費納入をお願いいたします。さらに 2010 年度 2009 年度の年会費未納の方は、ぜひともご納入ください。高く評価されている当会の活動は、皆さまのご支援あってこそなのです。
将来、日豪両国の芸術専攻生の教育交流にも発展させたいと考えています。オーストラリアやニュージーランドに寄贈日本画の里帰り展も実現したいと思います。ぜひご支援ください。

郵便振替　　00130-2-366249　社団法人海外と文化を交流する会
銀行振込　　三菱東京 UFJ 銀行渋谷支店（普）2266599　海外と文化を交流する会

会費 10,000 円（正会員）　5,000 円（特別賛助会員）　3,000 円（学生会員）

海外と文化を交流する会事務局
〒151-0053　東京都渋谷区代々木1-27-6　ﾊﾟｲﾝﾋﾙ内
TEL&FAX　03-3370-7654　　e-mail:jimukyoku@kaigai-bunka.org
http://www.kaigai-bunka.org